

令和 6 年 6 月 7 日現在

機関番号：32665

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2021～2023

課題番号：21K00401

研究課題名（和文）シェイクスピア上演の現象学的研究：特殊な配役と「生きられた経験」としての観劇

研究課題名（英文）A phenomenological approaches to the study of Shakespeare performances:
nontraditional casting and an audience's "lived experience"

研究代表者

阪本 久美子（HILBERDINK-SAKAMOTO, Kumiko）

日本大学・生物資源科学部・教授

研究者番号：50319240

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は広義の観客研究であるが、従来の観客研究の方法では解明できない、感情移入などの芸術作品への反応や意識下に生じる未分化の知覚を理解しようとする試みであった。観客反応という掴みどころのない現象を理解するために、上演時の物質的環境と偶然性を現象学的視点から分析した。具体的には、シェイクスピアの上演作品における特殊な配役に焦点をおき、観客の知覚に負荷がかけられた場合の受容を研究対象とし、これに今まで行ってきた上演の詳細な分析に結びつけて、観客研究の新たな方法が提案できたと考える。

研究成果の学術的意義や社会的意義

観客反応のメカニズムを解明するために、具体的な上演環境を現象学的に分析するという試みを通して、方法論としての現象学がシェイクスピアの上演研究、特に観客研究において有用であることを提案できたと考える。特に、近年の多様性論争の結果として実施されている特殊な配役（異性配役、ジェンダー・ベンディング、カラー・ブラインド配役など）における役者の身体によって作られる環境を考慮した観客研究には、現象学的な視点からの環境分析という手法、新たな方向性を示した。

研究成果の概要（英文）：The objective of this study was to gain insight into the audience's emotional responses to artworks, including empathy and the emergence of undifferentiated perceptions within consciousness, which conventional audience research is unable to fully elucidate. In order to comprehend this elusive phenomenon, the material environment and coincidences that occurred during a performance were analysed through the phenomenological approach. This, it may be argued, represents an innovative approach to audience research when coupled with a comprehensive analysis of performance.

研究分野：初期近代イギリス演劇

キーワード：シェイクスピアの上演研究 現象学的アプローチ ジェンダー

1. 研究開始当初の背景

上演における身体研究では、記号論が長年にわたり理論的支柱を提供してきたが、実際の上演における感情を理解するには限界があると思われた。そのため、物質や身体性に注目した現象学が応用されることになった。現象学的方法論の上演研究への応用は、Stanton B. Garner の *Bodied Spaces: Phenomenology and Performance in Contemporary Drama* (1994年) に始まる。哲学からの出発した現象学は、認知科学、運動感覚論(キネステーゼ)、文学批評由来の受容理論に代わる観客理論など様々な領域と組み合わせられることにより、非常に学際的な様相を呈しており、同時に様々な領域への応用が可能な理論であることが実証されてきた。この現象学の理論としての柔軟さを、シェイクスピアの上演研究に応用することを本研究は目指した。現象学のシェイクスピアの上演研究への応用は、Bruce Smith の *Phenomenal Shakespeare* (2010年) が草分けとなったが、歴史が浅い分野であり、後続研究も少ない。

2. 研究の目的

役者と観客の身体を含んだ上演時の物質的環境と偶然性を現象学的に分析し、「感情移入」に代表される人間の芸術作品への反応、意識下に生じる未分化の知覚を理解することである。そのために、フランス人哲学者メルロ＝ポンティの現象学に基づいた理論的な考察を足がかりにして、特定のシェイクスピア作品の上演を現象学で言う「生きられた経験」として検証することを目指した。具体的には、異性配役やダブリングのような特殊な配役を行なった上演、つまり観客の知覚に負荷がかけられた場合の受容を研究の対象として、その上演環境を現象学的に分析することにより観客反応のメカニズムを解明しようと試みた。同時に、方法論としての現象学がシェイクスピアの上演研究において有用であるかを探った。

3. 研究の方法

(1) 方法論の研究

現象学に関して、メルロ＝ポンティを中心に、現象学の一次資料および現在までに出版された批評を含めた文献調査を実施。現象学の芸術への応用は、ダンスや舞踏において特に実践されているため、それらの文献を調査し、シェイクスピアの上演における上演環境の分析とその上演環境の効果である観劇体験への影響を探った。

(2) テキストと上演の調査

異性配役、現代社会の多様性を反映した配役、ダブリングという点で注目すべき上演作品のテキストを精読し、上演において現象学的検証を実施した。上演の検証においては、シェイクスピア上演の実地調査のみでなく、ストリーミングやDVD/ブルーレイによる映像資料の閲覧を行い、細部にわたる分析を行った。

4. 研究成果

(1) 2021年度の研究成果

現象学の一次資料、現象学の影響の元に執筆された方法論や実践に関する論文、現象学の文学・演劇学への影響を論じた論文、シェイクスピア批評とも関連した論文などにより、幅広く文献調査を行った。新型コロナウイルス感染症の影響により上演の実地調査は国内に限られたが、2021年度中盤まではストリーミングによる海外の上演の視聴も可能であったため、現地に出向かずに一部の上演の調査を行った。結果として、以下のような成果をあげることができた。

オンライン開催されることになった第11回世界シェイクスピア会議 World Shakespeare Congress では、Plenary Roundtable の一つである Gender and Sexuality: The State of the Fields に、5人の登壇者の一人として参加した。シェイクスピア批評のジェンダー関連分野における方向性を議論するためのパネル・セッションであったため、現象学的な上演批評のフェミニスト批評的応用について発言し、テキスト重視のアプローチの中で唯一シェイクスピアの上演研究からのジェンダー研究の可能性を示した。

ジェンダー関連では、PARCO 劇場で上演されたオールフィメールの『ジュリアス・シーザー』のプログラムに、異性配役と観客に関する論考を寄稿した。

国際的な共同研究では、Asian Shakespeare Intercultural Archive (A|S|II|A) にリード・エディターの一人として参加し、Asian Intercultural Digital Archives (AIDA) によるワークショップ(オンライン開催) に出席した。

(2) 2022年度の研究成果

シェイクスピア上演の実地の検証を進めることにより、現象学的アプローチを上演研究に利

用するための方法論を確立しようと試みた。国内外での上演及び上演録画や海外の上演のストリーミング映像の視聴をさらに実施した。以下の通り、現地調査や論文の発表などを行った。

新型コロナ感染症の終焉により、2月にはイギリスのロンドン及びストラットフォード・オン・エイボンにて上演視察が行えた。特にグローブ座の Sam Wanamaker Playhouse では、*Titus Andronicus* のオールフィメール・ノンバイナリー上演を視察することができた。近年配役に関する多様性と可視化の方針の実現が進んでおり、「特殊な配役」の宝庫となったイギリスでの上演視察は重要であった。特にノンバイナリー上演は、今後単なるオールメールやオールフィメール上演に代わる上演におけるジェンダー表現になると思われ、先駆的となる上演を視察できたことは非常に有意義であった。

日本英文学会第94回全国大会シンポジウム：シェイクスピアとフェミニズム的受容のコーディネーター兼登壇者として「ブルータスは高潔の士か？オールフィメール上演とエンパワーメント」と題した口頭発表を行った。

前年度より進めていた日本の文化、サブカルチャー、歴史、文学から異性装を考察する、日本文学者との共同研究の成果として、集英社インターナショナル新書『異性装：歴史の中の性の越境者たち』で、「シェイクスピアのオールメール上演の楽しみ方」と題した一章を執筆した。文化的・社会的背景により形成された上演環境としての役者の身体について、現象学的に分析する試みを行った。

前年度より継続して参加している、国際プロジェクト Asian Shakespeare Intercultural Archive (AISI:IA)において、ジェンダー・エディションに含まれる劇団スタジオライフによる『十二夜』公演の注釈入れ作業を、他の2名のエディター(イギリス人及びシンガポール人研究者)と共に実施した。関連して、スタジオライフの脚本家兼演出家である倉田淳氏へのインタビューも行った。

(3) 2023年度の研究成果

シェイクスピアの上演を現象学的に検証するため、国内外での上演及び上演録画や海外の上演のストリーミング映像の視聴をさらに実施する一方、最終年度における研究成果の発表を行った。

7月末にイギリスのリバプール大学にて開催された英国シェイクスピア協会 British Shakespeare Association (BSA)の年次学会では、「To be blind or not to be blind?: the complex body in all-female theatres」のタイトルで研究発表を行い、登場人物の性別や人種により配役される役者を限定しない blind casting という特殊な配役について、地元及び北米からの会議出席者と意見を交わした。また、現在配役に関しては政治的な観点からの分析が主流となっているイギリスで、芸術面での受容に焦点を当てた現象学的なアプローチについて議論が行えた。学会出席後はロンドンに移動し、グローブ座などで特殊な配役を含んだ上演を視察した。

清泉女子大学において、『ハムレット』のオールフィメール上演に取り組んでいた学生たちを対象に、異性配役について講演を行った。

Shakespeare Intercultural Archive (AISI:IA)の国際共同研究でも、ジェンダー・エディションのリード・エディターとして、現象学的なアプローチからの検証も含めた critical introduction を執筆した。

2021年の第11回世界シェイクスピア会議での発表論文をもとに、*Shakespeare Survey 77*への寄稿論文を仕上げた。

英国シェイクスピア協会の学術誌である *Shakespeare* に、オールメール劇団スタジオライフによる『お気に召すまま』上演に関する論文を寄稿した。

(4) 3年間の成果のまとめと今後の課題

初年度は新型コロナ感染症の影響により、国内外とも上演数が減ったが、逆に理論的な調査を進めることができ、それが後半の研究成果に繋がった。観客研究は、人間の芸術作品への反応という掴みどころのないものを理解しようとするものである。同様に掴みどころのないことに着目したメルロ＝ポンティの現象学は、時間と空間を共有する役者と観客の相互反応を分析する上で非常に役立つ理論だ。近年のイギリスでは芸術作品である上演を政治的影響から分析する方法が目立つのに対して、芸術としての上演作品を全面に押し出す検証方法を示したことは本研究の重要な成果であると考えられる。一方で、理論の枠組みをそのまま嵌めるような手法は取れないため、特に観客及び役者の心情を現象学的に仮定するには、上演の場の文化的・社会的要因をさらに深く探っていく必要性を実感し、今後の課題とした。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 2件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 Kumiko Hilberdink-Sakamoto	4. 巻 -
2. 論文標題 'And All Is Semblative a Woman's Part': Japan's All-Male As You Like It	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 Shakespeare	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 Kumiko Hilberdink-Sakamoto	4. 巻 77
2. 論文標題 'Thoughts on Gender and Casting', 'Gender and Sexuality: The State of the Fields'	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 Shakespeare Survey	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1017/CB09781316258736	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 阪本久美子	4. 巻 なし
2. 論文標題 女性の身体 + 男性の台詞 = ?	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 パルコ劇場制作『ジュリアス・シーザー』プログラム	6. 最初と最後の頁 38-39
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Kumiko Hilberdink-Sakamoto	4. 巻 60
2. 論文標題 Book Review: Shakespeare Performances in Japan: Intercultural-Multilingual-Translingual	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Shakespeare Studies	6. 最初と最後の頁 21-23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 Kumiko Hilberdink-Sakamoto
2. 発表標題 To be blind or not to be blind?: the complex body in all-female theatres
3. 学会等名 British Shakespeare Association Liverpool 2023 (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 阪本久美子
2. 発表標題 ブルータスは高潔の土か？ オールフィメール上演とエンパワーメント
3. 学会等名 日本英文学会第94回全国大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Kumiko Hilberdink-Sakamoto
2. 発表標題 'Opening Remarks', Gender and Sexuality: the State of the Fields Roundtables
3. 学会等名 第11回世界シェイクスピア会議（オンライン開催）（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 中根千絵、本橋裕美、東望歩、江口啓子、森田貴之、日置貴之、阪本久美子、伊藤慎吾	4. 発行年 2023年
2. 出版社 集英社インターナショナル	5. 総ページ数 272
3. 書名 異性装：歴史の中の性の越境者たち	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
シンガポール	シンガポール国立大学			
米国	シラキユース大学			